

監督・ばんざい!

2007(平成19)年6月7日鑑賞(テアトル梅田)

★★



監督・脚本・編集＝北野武／出演＝ビートたけし／岸本加世子／鈴木杏／江守徹／吉行和子／宝田明／高道峻／藤田弓子／内田有紀／木村佳乃／松坂慶子／大杉漣／寺島進／六平直政／渡辺哲／つまみ枝豆／福井裕子／中嶋和也／三瓶憂拓／若林航平／井手らっきょ／菅田俊／石橋保／蝶野正洋／天山広吉／ナレーション＝伊武雅刀（東京テアトル、オフィス北野配給／2007年日本映画／104分）

……タレント、ビートたけしを壊した『TAKESHIS'』（05年）に続いて、監督北野武を壊そうとした異色作が登場！ しかし前半はまだしも、お茶の間ギャグを満載した後半のストーリーのくだらなさとその俗悪さにはウンザリ……？ 観客数の比較からも、天才松本人志（？）の追い上げにどう対処するの……？ もっとも、壊すのは再生のため。したがって、天才たけしの第14作が、いかに再生した姿になるのかに期待したいが……？

『大日本人』 vs. 『監督・ばんざい!』

6月3日（日）に観た松本人志監督の『大日本人』（07年）は、梅田ピカデリーの大きな劇場で観客がいっぱいだったのに対し、北野武監督の『監督・ばんざい!』は、テアトル梅田の大きな劇場ながら観客はわずか20名程度と対照的……。松本人志初監督作品ということで、マスコミの注目が『大日本人』に集中したというハンディキャップはあるものの、「世界のキタノ」というブランドがあるうえ、カンヌ国際映画祭では、世界の35人の監督の1人としてつくった、3分間の短編映画『素晴らしき休日』が同時上映されるという「付加価値」があるはずなのに、この有り様は一体ナニ……？

天才たけしが目指したものは……？

考えていることが凡人にはわからないところが天才の天才たる所以だろうが、北野

武「監督・ばんざい！」公式ガイドブックによれば、この映画で北野武監督が描くイメージは、「映画ってウンコみたいなもんだからね。自分の中で一回、吸収、消化しておかないとダメなんだ。ある程度、腹の中に入れて、こなしたものだと、わりかし絵になる。」ということらしい……。いかにも「天下の毒舌家」を自認する彼らしい文章で、これがまさに「天才たけし」と言われる所以なのだろうが、私には理解の範囲外……？

また、この映画が監督13作目になる北野武監督は、前作の『TAKESHIS'』（05年）に続いてこの『監督・ばんざい！』で、「自分を壊す」ことを目指したらしいが、私にはこれもそのココロがよくわからない……？

『TAKESHIS'』について私は、「悪趣味もええ加減に……」「どうしてこんなに銃の乱射が好きなの……？」「脈絡のない夢の中のお話にウンザリ……」と悪口三昧の評論を書いた（『シネマルーム9』398頁参照）が、この『監督・ばんざい！』のくだらなさやバカバカしさはそれを上回るもの……？ 前半はまだマシだが、後半は特にそう……。

『キネマ旬報』6月上旬号のインタビューや公式ガイドブックのインタビューを読めば、相変わらずたけし流の毒舌が飛び交っているが、これがすべて計算された言葉であることは明らか。しかして、ホントに天才たけしがこの映画で目指したものは……？

北野武 vs. キタノ・タケシ、キタノ・タケシ vs. タケシ人形

『TAKESHIS'』も、大物タレントのビートたけしと売れない役者の北野武の2人が登場し、また過去の北野映画の名シーン（？）が次々と登場したが、そのスタイルは『監督・ばんざい！』でも全く同じ……？ すなわち、『監督・ばんざい！』では、北野武監督とおバカなキタノ・タケシ監督の2人が登場し、映画監督の悩みが綴られていくというのが基本的なストーリー。そして最後は、すべてがぶっ壊れる（自爆する？）のだが、映画監督はそんなことが自由にできるから「監督・ばんざい！」（GLORY TO THE FILM MAKER！）なのだというのがこの映画のオチになっている。しかし、それってそんなに面白い……？

また北野武監督は、北野武 vs. キタノ・タケシだけでは物足りないと思えて、キタノ・タケシの分身となるタケシ人形なるものを登場させた。この人形は各物語の中で

少しずつその姿を変えて登場するが、基本的にはホンモノのキタノ・タケシの都合が悪い場面になるとキタノ・タケシがその役割を人形に肩代わりさせるという、まことに人形をバカにしたズルイ活用をしているところがミソ……？ しかし、松本人志監督の『大日本人』に登場した、松本人志扮する大巨人や、バカバカしい跳ルノ獣、童ノ獣、縮ルノ獣、匂ウノ獣などの獣と同じように、このタケシ人形のアイデアも役割もイマイチ……？

もっとも、この人形を叩いたり蹴ったりしているシーンだけはやけにイキイキしていた(?)が、ひょっとしてそれは、出演者たちが何かのうっぶん晴らしをしていたの……？

ギャング映画は二度と撮らない……？

「ギャング映画は二度と撮らない！」と宣言してしまったおバカな映画監督キタノ・タケシが目指した次の作品は……？ これがこの映画前半の(いや全体の……?) テーマ……？

監督には、観客のニーズや好みそして時代の流れや流行を読む能力とともに、河瀬直美監督が自らを「映像作家」と称しているように、自分の思いを表現する「作家性」の両方が必要。もっとも、映画は所詮娯楽だから、いくら作家性が強くてでも楽しめる映画はダメ。もっとも、ここで言う娯楽とか楽しむという言葉は、アハハと笑えるような喜劇・コメディだけを指すのではなく、恐かったとか感動したとか泣いたということも楽しみの1つだから、そこが難しいところ……。

ギャング映画はキタノ・タケシ監督の1つのスタイルとして定着しているにもかかわらず、「ギャング映画は二度と撮らない！」と宣言してしまった彼が次に目指したのは、結局作家性を放棄して流行に乗ることだが、これはある意味で簡単。そこで、彼が第1に撮ったのは、小津安二郎監督ばりの静かな流れの中で家族の絆を描いた『定年』という映画だったが……。

第2作は……？ そして第3、4、5作は……？

前半の進行に大きなウエイトをもつナレーションを担当しているのは伊武雅刀。その伊武雅刀の声で、第1作『定年』については、「主役も定年を迎えた真面目なサラリーマンには見えず、バカな職人にしか見えなかった」というナレーションが入り、

結局断念。せっかくの松坂慶子、木村佳乃という大女優を使いこなせなかったのはキタノ・タケシ監督の無能ぶりを示すもの……？

そんなキタノ・タケシ監督が、次に映画はやっぱり純愛モノと考えてつくったのが、第2作の『追憶の扉』。これは、記憶をなくした男と、それを取り戻してもらおうと献身的に尽くす女の愛の物語で、内田有紀は立派な演技をしていたが、監督の構成力がなかったため、結局これもダメ。また『ALWAYS 三丁目の夕日』(05年)の大ヒットを受けて、昭和30年代の懐古路線を狙った第3作『コールタールの力道山』もダメ。そして、「ピストルがダメなら刀があるさ」とばかりに挑んだ第4作『青い鴉忍 PART 2』も、『座頭市』(03年)の二番煎じでダメ。さらにJホラーブームにあやかりろうとした第5作『能楽堂』も、「頑張ってメイクしたわりに、この顔はたいして怖くなかった」「これはお笑い映画ではないか、という噂が立った」というナレーションとともにバツサリ切り捨てられることに……。

しかしまあここまでは、監督の努力ぶりとダメぶりが面白く描かれており、『監督・ばんざい!』はそれなりの出来……。

SF大作『約束の日』から最悪の展開に……？

キタノ・タケシ監督の悪あがきはさらに続き、CGを含む映像技術の進歩を受けて、隕石が地球に落ちてくる中敢然と地球の危機に立ち向かうヒーローを描く、『ディープ・インパクト』のようなSFモノ超大作をつくろうとしたのは、私に言わせれば、キタノ・タケシ監督ではなく、北野武監督の運の尽き……？ すなわち、ここからこの『監督・ばんざい!』という映画は、最悪の展開に……？

もっとも北野武監督にしてみれば、『監督・ばんざい!』のメインは後半のこの『約束の日』であり、前半5作のキタノ・タケシ監督のチャレンジはいわばその予行演習……？ しかし、前5作がすべてパロディ色いっぱいの中途半端な出来だったのに対し、後半の『約束の日』は、私に言わせればお茶の間ギャグとお茶の間コントを満載しただけの趣味の悪い俗悪映画……？ かつて『風雲! たけし城』とドリフターズの『8時だヨ! 全員集合』がテレビの俗悪番組の代表と言われたが、まさに『監督・ばんざい!』がそれ……？ もちろん、『キネマ旬報』6月上旬号にも、公式ガイドブックにも、天才北野武監督を礼讃する記事が満載だから、こんなにボロクソに書くのは結構勇気があるものだが、それが私の正直な印象だから仕方なし……？

俗悪さ その1——暴力

以下、天才たけし礼讃論者からの批判を覚悟の上で、私なりのこの映画の俗悪さを、(書けばキリがないので) 数点だけ指摘しておきたい。その1は、たけし映画特有の暴力。それが端的に表れるのは、1つは蝶天ラーメンの店員A(蝶野正洋)と店員B(天山広吉)が、ラーメンにゴキブリが入っていたとクレームをつけてきた4人の客に対するプロレス技による徹底した痛めつけ。そしてもう1つは、風呂釜の中に入っているタケシ人形を、高円寺久美子(岸本加世子)と喜美子(鈴木杏)の母娘が徹底的に叩くシーン。ギャング映画での残酷さはまだ仕方ないと思って許せるものの、こんな形で暴力をギャグに使うのは俗悪そのものと言わざるをえないのでは……?

俗悪さ その2——お茶の間ギャグはお茶の間だけで……

私は『風雲! たけし城』も『8時だヨ! 全員集合』も観たのは数回だけだが、お茶の間でこんなアホバカ俗悪番組を観てアハハとバカ笑いしているのも、平和で豊かな国ニッポンだからと思って許していた(?)が、それを映画館でやられるともうウンザリ……。俗悪性に満ちたお茶の間ギャグは、あくまでお茶の間だけに限定してもらいたいものだが……。

俗悪さ その3——江守さんの挑戦は……?

日本映画界の重鎮江守徹は、何でもできる俳優だけに、北野武監督から頼まれればつい乗ってしまったのは当然……? しかして、『約束の日』で政財界の大物、東大泉大善役を演ずる江守徹の「怪演」は特筆モノだが、そんな江守さんをあなたは好き……?

役者魂を込めて名演・怪演をすればするほど、その俗悪さにいい加減にしろ、と思ったのは私だけ……?

俗悪さ その4——井手博士は引っ込め!

この映画後半のアホバカ俗悪ギャグの中でも最悪なのが、結構出演シーンの多い井手博士(井手らっきょ)の展開するギャグ。きっとテレビでもこんなギャグを連発してお茶の間の笑いを誘っていたのだろうが、映画館の大スクリーンの上で演じられる

彼のギャグはまさに最悪！ また公式ガイドブックに載っている井手らつきよ自身が語る、この映画の裏話を読めば、そのバカバカしさがさらに加重されてきたが、それもひょっとして私だけ……？

壊した後は……？

『TAKESHIS'』はタレント、ビートたけしの側から壊しにかかったもの。そして『監督・ばんざい!』は、監督としての自分を自分自身が壊しにかかり、最後は登場人物全体が「自滅」してしまうもの……？

もっとも、天才北野武監督らしく、映画の冒頭に登場するタケシ人形の健康診断（正確にはMR検査……？）と連動した最後のオチがついているのがこの映画の妙……？

いずれにしても、この2本の映画によって北野武監督が狙ったとおり、タレント、ビートたけしも監督北野武も壊れてしまったはず……？ しかし、このようにすべてを壊した後、北野武監督第14作となる次回作では、一体どんな再生、新生の姿が……？

2007(平成19)年6月8日記

ミニコラム

スサンネ・ピア監督、ばんざい！

人口4800万人の韓国の天才監督がキム・ギドク、人口2300万人の台湾の天才監督が蔡明亮^{ツァイミンリヤン}なら、デンマークの天才女性監督はスサンネ・ピア。デンマークの人口550万人のうち90万人が親たという『アフター・ウェディング』でそれを実感！ キム作品は映像の美しさとセリフの極端な少なさが特徴だが、スサンネ作品の映像の特徴はクローズアップの多用。俳優は大変だ

ろうが、特に目と口のアップによる豊かな表現力にはビックリ！ もちろん、ストーリー構成力の緻密さと伏線の張り方そしてアッと驚く結末の提示はキム監督らと同じ？ 07年のアカデミー賞外国語映画賞ノミネートによってがぜん世界的に注目されたスサンネ監督だが、その結果に注目しよう。

2007（平成19）年11月21日